

代表派遣報告書

IAP カンファレンス＋IAP 総会

日 程：2013 年 2 月 24～27 日（カンファレンス：2 月 24～26 日、総会：27 日）
場 所：Rio Othon Place(リオ・デジャネイロ/ブラジル)
主 催：IAP
開 催：ブラジル科学アカデミー

参加者：大西 隆（会長、第 3 部会員）
春日 文子（副会長、第 2 部会員）
黒川 清（元会長、特任連携会員：カンファレンススピーカー）
駒井 章治（若手アカデミー委員会委員長、特任連携会員：カンファレンス
チャレンジラボメンバー）
事務局随行者：佐藤 正一参事官（国際業務担当）、中村 典子参事官補佐

[1] IAP カンファレンス

テーマ：Grand Challenges and Integrated Innovations:
Science for Poverty Eradication and Sustainable Development
（グランドチャレンジと総合的イノベーション； 貧困撲滅と持続的
開発のための科学）

アジェンダ&カンファレンス概要：

2 月 24 日(日)

- オープニングセレモニー：共同議長挨拶、ブラジル科学アカデミー会長
Prof. Jacob Palis 挨拶等
- 基調講演：Marco Antonio Raupp
ブラジル、科学技術・イノベーション担当大臣
“Science for Poverty Eradication and Sustainable
Development”（貧困撲滅と持続的開発）

2 月 25 日（月）

- カンファレンスコミッティー共同議長 Dr. Peter Singer & Dr. Marcello
Barcinski 挨拶
- 「The Future We Want（私達が欲する将来とは）」セッション：
（4 名の講演者による発表（10 分）の終了後、まとめて討論）
テーマ：The Role of Science in Coping with the Grand
Challenges Facing Humanity（人類が直面するグランドチャレ
ンジに対応するにあたっての科学の役割）
- チャレンジラボ：
（各テーマの講演者 3 名による発表（6 分）の後、小グループに分かれ、
目標を決めた議論を行う（テーマ A と B はパラレル形式にて議論）。そ
の後、議論の内容&結論をプレナリーセッションにて発表し、更に議論。
その概要及び結果を総会で発表。）

- テーマ1 : Improving science literacy (科学リテラシーの改善)
- テーマ2 : Improving global food security (グローバルな食料の安全保証の改善)
- テーマ3 : Improving global health (グローバルヘルスの改善)
- テーマ4 : Enhancing access to safe water and sanitation (安全な水と衛生へのアクセス改善)
- テーマ5 : Coping with climate change (気候変動への対応)
- テーマ6 : Towards a sustainable energy future (持続可能なエネルギーの未来に向けて)
- プレナリーセッション：チャレンジラボのテーマ毎の報告＋ディスカッション

2月26日(火)

- 全体会議：(本カンファレンスのテーマ “Tackle the Grand Challenge of Poverty Eradication and Sustainable Development (貧困撲滅と持続的発展というグランドチャレンジと戦う)”に関連し以下の3つのテーマについて講演者3名がスピーチを行い、その後に質疑応答。)
 - Science Academies Working together to Tackle the Grand Challenge of Poverty Eradication and Sustainable Development (貧困撲滅と持続的開発のためのグランドチャレンジに対して協力する科学アカデミー)
 - Grand Challenges and Integrated Innovation: Lessons from the Experience (グランドチャレンジと総合的イノベーション：過去の経験から学ぶ)
 - Bridging Grand Challenges and Integrated Innovations with Poverty Eradication and Sustainable Development: Challenges and Opportunities (グランドチャレンジと総合的イノベーションを、貧困撲滅と持続的な開発につなげる：課題とチャンス)
- 全体会議：質疑応答の後とりまとめ

IAP Conference ハイライト

- 🌐 IAP Conference 開催に向け、昨年6月よりカンファレンスコミッティーが立ち上げられた。日本からは春日文子副会長がメンバーの一員として日本からの要望を届けるとともに、各国代表者との電話会議での議論を重ね、本カンファレンスを具体化する業務に深く関与した。
- 🌐 本カンファレンス冒頭(2月24日夕刻)に、ブラジル科学技術イノベーション担当大臣 Marco Antonio Raupp 氏が、“Science for Poverty Eradication and Sustainable Development”についての基調講演を行った。同国は、かねてより貧困に苦しんでおり、同国政府のプライオリティーとして科学技術を推進している。同国の貧困を打破するためには経済的、社会的背景を大きく改善する必要があり、そのための具体的解決方法としては、世界第5位の人口全体に対し教育を徹底させることが重要であることが示唆された。同時にブラジルは生物多様性に関連し、多くの生物種を擁しており、そうした点でも科学技術教育は、大きな意味を持つとし、1940年～50年代以降同国で大学教育に

力を注いできたことが紹介された。科学は貧困撲滅と持続的発展を向上させるための主要ツールと位置づけ、それなりの成果はもたらされたものの、近年ではそのシナリオにも変化が訪れており、社会のために科学を効果的に利用するには政策決定や資金獲得、国際協力という観点が大きな意義を持つようになり、そうした視点からも、今回の IAP カンファレンスは非常にタイムリーであり、今後が期待されると結んだ。また、同国はこれまで継続的にハンガリーで開催されてきたワールド・サイエンス・フォーラムを本年 11 月自国ブラジルで開催する予定であり、今後も持続的発展に貢献してゆく姿勢があることがアピールされた。

- ✚ 本カンファレンスでは、最近、サマーダボスや GYA (Global Young Academy) などでも積極的に取り入れられている「チャレンジラボ」という新方式を用いられてカンファレンスが進められた。本方式では、スピーカーが講演を行ないその後に質疑応答を行うばかりでなく、講演者のスピーチ内容を軸に、会場参加者も含めた小グループに別れ、決められた論点で論議してもらう形式で議論を進めてゆく。こうした小グループにおいては、各人の体験や疑問、提案などを挙げてもらうことが可能になるため、ボトムアップ型でフロアの経験等も広くすくいあげることから、難問へのソリューション発見のためのチャンスを高める効果がある。
- ✚ 本カンファレンスの「チャレンジラボ」においては、テーマ 3 : **Improving global health** (グローバルヘルスの改善) に関連し、日本学術会議若手アカデミー委員会委員長の駒井章治委員から、「メンタルヘルスの診断に情報処理技術 (ビッグデータ等) を用いる」という内容の発表が行われ、小グループにおいて質疑応答や各国での状況に関連する意見交換が行われた。画像処理技術により、人間の微細な行動の違いを捉えることができるという反面、データ収集の点で、プライバシーや倫理的観点からの精査が必要にではないかという観点で議論が進められた。また、駒井委員は、テーマ 2 : **Improving global food security** (グローバルな視点での食料の安全保証の改善) における **Rapporteur** (取りまとめ結果発表者) となり、またチャレンジラボセッションの最終取りまとめのための全体セッション (Plenary Session) においても取りまとめ結果の発表を行なった。
- ✚ また、「チャレンジラボ」のテーマ 4 : **Enhancing access to safe water and sanitation** (安全な水と衛生施設へのアクセス改善) においては、日本学術会議の春日文子副会長がモデレーターを務めた。
- ✚ カンファレンス最終日 (2 月 26 日) の最初のテーマ : **Science Academies Working together to Tackle the Grand Challenge of Poverty Eradication and Sustainable Development** (貧困撲滅と持続的開発のためのグランドチャレンジに対して協力する科学アカデミー) において、特にアジア地域の代表として韓国の Won-Hoon Park (President of Association of Academies and Societies of Sciences in Asia (AASSA)) からの発表があり、ミレニウム開発ゴール (Millennium

Development Goals: MDGs) が期限内に達成できそうもないという現実に関連し、特に貧困撲滅が今後の世界の対応にとって非常に重要であり、かつその問題への対応には経済発展、社会の発展、文化の発展が大きく寄与しており、根本的にはリソースとして人の **Governance** がそれら全ての基本になっていること；科学技術の観点からは、その進歩を世界でシェアすることが本当の国際協力であることが強調された。またアジア地域の最近の動きとしては、AASA と FASAS の 2 組織が統合し AASSA となり、一部の中東地域、アジア全域及びオセアニアのアカデミーの多くの国を含む組織になったことが報告され、多様性に富む地域ながら、今後のさらなる協力関係において、専門家の派遣やトレーニング、ワークショップの開催などに加え、他の地域のネットワークとの連携も視野に入れることが述べられた。

同テーマについては、引き続き欧州代表としてドイツの Volker ter Meulen (Immediate Past President, European Academies' Sciences Advisory Council (EASAC)) から欧州の観点からの発表があった。同組織は EU 諸国の科学アカデミーをメンバーとし、政策決定者等の諮問機関としての役割を担っており、IAP の科学者ネットワークばかりでなく、他の地域（特にアフリカ NASAC) のネットワークと連携も数々行っていることが述べられた。地球規模での問題である、気候変動、代替エネルギー、感染症等含むグローバルヘルス問題に加え、遺伝子組み換え植物等に関しては特にアフリカの科学者ネットワークとの連携も多々あり、また、最近の話題の一つとなっている若手アカデミーについても、欧州がその設立をリードする土壌を与えたことが紹介された。今後の課題として、科学アカデミーとしては、Policy サイドのパートナーを見つけることや過去の提言・諮問に対するフォローアップについてもその重要性が強調された。単一のアカデミーではなし得ないことが Network で可能になることが最後に述べられた。なお同氏は、翌日の IAP 総会において先進国サイドの共同議長に選出されたことを特筆する。

上記発表後、大西会長からは、科学アカデミーと一般人との距離を狭めるためにはどのような工夫をこらしているかを紹介して欲しい旨のリクエストが出され、アフリカ科学アカデミーネットワーク、アメリカ科学ネットワーク、アジアの科学ネットワーク、及び欧州の科学ネットワークからそれぞれの返答があった。ジャーナル掲載、刊行物発行、広報活動の強化等が紹介された。

また同日には、日本学術会議黒川清元会長から、2 番目のテーマ：Bridging Grand Challenges and Integrated Innovations with Poverty Eradication and Sustainable Development: Challenges and Opportunities (グランドチャレンジと総合的イノベーションを、貧困撲滅と持続的な開発につなげる：難問とチャンス) に関連するスピーチが行われた。同スピーチにおいては、黒川清元会長より、情報技術革命がもたらした社会・経済・世界の変化に関して講演が行われた。1990 年代をウェブ 1.0 (インターネットの萌芽期)、2000 年代最初の

10 年間をウェブ 2.0（タッチパネルや知識アクセス容易化の時期）、2010 年代を次のウェブ期（人々のささやきが時代を動かし始めている時期）と位置付け、こうした情報化時代における人々や社会の意識変化に対応する科学者の思考法について、啓蒙的示唆を含んだ内容の話であった。

✚ IAP カンファレンス全体を通し、科学者・研究者以外に、Grand Challenge Canada、Bill & Melinda Gates Foundation、USAID などの Funders(研究資金提供団体)からの出席者、Nature など科学誌記者などが、モデレーターや講演者として多く出席していた。IAP のような国際学術機関がこうしたステークホルダーとの関係を重視せざるを得ない段階に入ってきたことには間違いがなく、日本も含め各国の科学アカデミーにとっても、Grand Challenges の解決のためこれまでの活動枠から一方踏み出し、より解決策に近い部分にも積極的にアプローチしてゆくことが強く示唆された。

✚ サイドイベントとして2月26日のカンファレンス終了後に英国王立協会からの提案で「Science as an open enterprise: Open Data for Open Science」が開催された。同組織が作成した報告書「Science as an open enterprise: Open Data for Open Science」についてその趣旨等が説明されたと同時に、IAP メンバー組織からの参加者からの意見等が寄せられ、その後フリーディスカッションとなった。日本からは、春日文子副会長より、日本でのデータの公表状況が報告され、特にネガティブデータの公表・共有は意味があり、企業や地方自治体における政策評価にとってはネガティブであっても重要であるという趣旨での発言があった。

✚ ICSU（世界科学会議）の Sergio Pastrana 副会長、Gordon McBean 次期会長、ICSU CSPP(戦略評価委員会)委員である Juan A. Asenjo チリ科学アカデミー会長と春日副会長は、IAP カンファレンスの各所において ICSU の立場でも発言し、IAP と ICSU の連携の必要性を訴えた。

[2] IAP 総会

2月27日（水）

主に以下のアジェンダについて議論及び決議が行われた：

- 前回の総会（2010 年@ロンドン）議事録の承認
- 3 年間の活動報告
- 会計報告
- 前日まで3日間の日程で行われた IAP カンファレンスの概要&結果報告
- メンバーシップ委員会からの報告と新メンバーの承認
- 若手科学者 & GYA（Global Young Academy）との連携
- DAC (IAP/IAC Development Advisory Committee) & ファンドレイジング
- 関係組織からの活動報告（AASA/AASSA, EASAC, IANAS, IAC, IAMP）

- IAP Strategic Plan II について実施された活動
- IAP Strategic Plan III (2013-2015)骨子案の紹介と承認
- IAP Statutes and Rules of Procedures 改定案の説明と承認
- 選挙（共同議長&執行委員）

IAP 総会 ハイライト

- ✚ IAP Strategic Plan III (2013-2015)骨子案については、特に **six strategic priorities** にフォーカスが当てられて議論が進められた。特に **Science Education** に関連しては、日本からの提案の一つが取り上げられた。その他、各国からのコメント等も踏まえ、若干の修文が入った形で骨子が承認された（修文後の骨子案依頼中）。
- ✚ IAP Statutes and Rules of Procedures 改定案についても、各国からの意見を踏まえ、多少の修文が入った形で改定案が承認された。各国からの選挙権数については日本から予め「各国一票とすべき」というコメントを提出してあったが、今回の議論の中で別の部分で英国から提案された修正案により「各国一票」となることが明確となったため、日本からは特に現場での発言は行わなかった。
- ✚ 共同議長&執行委員の選挙については、日本学術会議の大西隆会長が先進国サイドの共同議長選挙において、ドイツレオポルディナ **Volker ter Meulen** 前会長（President, European Academies' Sciences Advisory Council (EASAC)）に敗れたものの、日本学術会議としては IAP 執行委員メンバーに選出されるという結果となった。詳細な選挙結果は添付のとおり。

なお、今回の IAP カンファレンス&総会の期間中、テーマである **Grand Challenges and Integrated Innovations: Science for Poverty Eradication and Sustainable Development**（グランドチャレンジと総合的イノベーション； 貧困撲滅と持続的 開発）に関連する案件のポスター展示、及び日本の活動を紹介するためのパンフレット類の展示を行った。ポスター及び展示物は以下のとおり：

ポスター：

サハラソーラーブリーディング計画（2009 年 G8+5 Academies' Meeting（イタリア開催）の際の紹介案件：鯉沼 秀臣連携会員（東京大学大学院新領域創成科学研究科客員教授）に資料をご提供頂きました）

パンフレット等：

- 日本学術会議（英）
- アジア学術会議（英）
- JICA Profiles（英、仏、墨、露）
- SATREPS（英、仏）
- TICAD V
- 野口英世賞、厚生労働省（母子手帳関係リーフレット）
- 理化学研究所感染症研究国際ネットワーク推進プログラム（J-GRID）
（外務省 軍縮不拡散・科学部、JICA 国際科学技術協力室、内閣府 野

ロ英世アフリカ賞担当室、厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 母子保健課、
独立行政法人 理化学研究所 新興・再興感染症研究ネットワーク推進セン
ターに資料をご提供頂きました)



